

はじめに

本報告書は、平成 22 年度に岡山大学文学部プロジェクト研究経費を得て実施した共同研究「近代展示思想における表象観念と文化」の研究成果の一部である。

具体的な研究成果の提示に先立ち、研究メンバー、研究目的、今後の研究の発展可能性等について述べて置くことにしたい。

【研究メンバー】

鐸木道剛：哲学・芸術学専修コース

渡邊佳成：歴史文化学専修コース

遊佐 徹：言語文化学専修コース（研究代表）

【研究目的と成果の概要】

本プロジェクトを企画した平成 22 年とは、上海で万国博覧会が開催された年でもあった。この史上最大規模を謳った巨大「国威発揚」イベントが、もちろん単なる祝祭の意味を超えて、可視化を通じた時の権力による政治的主張のアピールの空間でもあったことは、容易に理解できるはずである。まさに M・フーコーの指摘するとおり、伝統的に権力とは見られることを欲し、また見られることを利用して権力を真にそれたらしめようとする一面を持っているのである。こうした権力・権威のディスプレイは、人類文化の発展の過程において様々に産み出され、利用されてきた歴史を持つが、「近代」を境に大きく変化したという事実もある（万国博覧会がその好例である）。国民国家の形成、帝国主義の伸張、産業革命、科学技術の進歩……これらの変化がそもそも「見る——見られる」、「見せる——見出させる」といった関係（当然、権力・権威のディスプレイ以外の関係においても）に新しい枠組みを用意したことはいうまでもない。そして、それが「近代」同様、西洋世界主導のもとで作り上げられ、広められていったという事実も確認されなければならない。本プロジェクトは、非西洋（日本、中国、東南アジア）、非西欧（ロシア、東欧）世界が、西洋世界によって先行的、主導的に形成され広められてきたそうしたいわば「展示思想」にどのように反応（対象化、反発、受容、利用）したのかを解明することを目指したものである。

1 年間におよぶ研究期間内において、本報告書に掲載した 3 編の論考を成果として得ることができたが、その他の研究成果として以下のような活動を実施したことをご報告して置く。

○鐸木

仏教における表象と表象不可能性についての観念の起源を、中国の唐時代の慧沼（620-714）を通じて大乘仏教の根源である唯識論にさかのぼった。それ

は明恵（1173-1232）から夢窓国師（1275-1351）の鎌倉時代にも受け継がれ、仏教における表象可能性の根拠の思考となった。このことについてはクラフ（ポーランド）での日本美術についての学会（10月）と、台北（台湾）でのロシア美術についてのシンポジウム（12月）で発表し、岡山大学文学部プロジェクト研究報告書「近代アジアにおける表象観念と文化」のなかで出版した。

○渡邊

東南アジアにおける展示思想と表象観念を主たる研究対象とし、古代、中世に行われていた宗教の痕跡が、その後の宗教状況の変遷の中で、どのように残され、壊され、今日に伝わっているのかを考える手がかりとして、博物館および寺院などの宗教施設に残されている彫刻、遺物などの調査を行い、目録化を行う基礎作業を進め、文献史料および美術考古資料の収集につとめた。その成果の一部を、3月に大阪で行われた研究会で報告した（2011年3月5日、第51回東南アジア彫刻史研究会（於大阪人間科学大学）発表題目「古代、中世東南アジアにおける「廃仏」と「廃ヒンドゥー？」——ピュー、パガン時代のビルマを中心に——」）。

○遊佐

「中国人と博覧会」を中心テーマとして、清朝政府が初めて自発的、且つ積極的に参加した万国博覧会である1904年のセントルイス万国博覧会、および中国人の手になる初の大規模博覧会として記憶される1929年の西湖博覧会に関する資料の収集に努めた。前者については北京の国家図書館において資料調査を実施し、その成果の一部は著書『蠟人形・銅像・肖像画—近代中国人の身体と政治』（白帝社 2011年）に反映させた。後者に関しては、杭州市にある西湖博覧会博物館での調査も実施した。

また、本報告書に掲載した研究結果以外にも2013年3月13日に研究メンバー3名を中心に韓国高麗大学より3名の研究者を招いて、「物質文化：韓国からみた日本」と題する「岡山大学文学部人文学フロンティア2012シンポジウム」を開催し、今後の岡山大学文学部の特質を活かした新しい共同研究のテーマ構築の足掛かりを得た。

【研究の発展可能性】

研究目的と成果の概要欄においても述べたように、本プロジェクトは、極めて独創的なテーマ設定に基づく試みであり、表象文化研究の新たな地平を開く可能性を秘めたものであるといえる。

この試みを継続し、また内容的に充実したものとするために、同一メンバーによって、平成23年度には「災害・戦争・疫病の表象観念と文化」、平成24年度には「古代・古典・伝統の発見／創造における表象観念と文化」という研究プロジェクトが生まれ、研究の進展が図られている（上記のシンポジウムも

その一環として計画されたものである)。将来的にはこれら複数のプロジェクト、およびこれら以前に計画、実施されたプロジェクト研究「近代アジアにおける表象観念と文化」(平成 20 年度)、「東西宗教交流史における表象観念と文化」(平成 21 年度)によって得られた研究成果をまとめ書籍化することを目指している。